巡業で発展 博多興行史

名城大・岩井教授が刊行

名城大の岩井眞實教授（演劇学・近世文学）が研究書『近代博多興行史―地方から中央を照射する―』（文化資源社）＝写真＝を刊行した。福岡女学院短大勤務時から30年に及ぶ研究の成果で、膨大な新聞記事などの資料調査に基づき、巡業を中心に発展した博多の演劇史を明らかにしている。

自前の一座がなかった博多での演劇は江戸時代、寺社境内の仮設小屋に上方から歌舞伎や浄瑠璃を招致して始まった。明治に入ると「永楽社」（現・福岡市博多区中洲）など常設の芝居小屋が建てられ、その後劇場となっていった。本書では日清戦争や松竹の全国での劇場展開、映画伝来といった時代の流れに沿って博多の各劇場の盛衰を解説している。

世相を風刺する「オッペケペー節」で知られた博多出身の演劇人・川上音二郎（1864～1911年）にも紙幅を費やした。川上一座が地元で児童生徒の招待公演を繰り返して観客層を拡大した様子や、折りたたみ式の大道具を東京から運び込んだエピソードを紹介し、興行師としても先進的だった手腕を評価している。

資料編として、演劇のプログラムに当たる芝居番付の目録と明治の興行年表も付けた。目録など今回掲載しきれなかった全体で70万字を超える調査結果は、将来的にデータベースとして公開する意向だ。岩井教授は「東京、関西を中心に語られてきた近代演劇史に風穴を開けられたのでは。ほかの地方でも研究が進む端緒となってほしい」と話している。1万9800円。